

保育の質を高める一方法 —実践記録から"私"の保育を振り返る—

One Method of Improve the Quality of Childcare and Education —Reflection by Using My Own Practical Record—

和田 公子 三輪 和子¹ 石原 由貴子² 藤村 朱美³
木下 育子⁴ 大内 菜恵子⁵

WADA Kimiko MIWA Kazuko ISHIHARA Yukiko FUJIMURA Akemi
KINOSHITA Ikuko OUCHI Naeko

幼児期は人格形成の基礎を培い生きる力を育む重要な時期であることを鑑みれば、保育の質の向上は避けて通れない。幼稚園教員が事例を持ち寄り、保育の質を高める方法を探った。本論では2つの事例を報告する。ひとつは、複合的な原因による保育者の心の揺れが子ども理解を歪めることになったが、自身を振り返ることで理解の変容が見られた事例である。次に子どもが遊びや生活の中で偶然（たまたま）の出来事と出会い、保育者も共にそれを楽しむことで保育が豊かに展開した事例である。これらの事例から保育の質について分析を試みた。

キーワード：保育の質、実践記録、振り返り、セレンディピティ

Key Words：Quality of childcare and education, Practical record, Reflection, Serendipity

1. はじめに

文部科学省において、平成14年度に「幼稚園教員の資質向上について—自ら学ぶ幼稚園教員のために—」¹⁾が報告された。その中で、幼稚園教員の資質を、子ども教育に対する情熱と使命感に立脚した、知識や技術の総体ととらえている。本研究は、奈良県内の公立幼稚園に勤務する保育者で構成する「奈良保育実践研究会（以後実践研という）」において、保育者のさらなる資質向上を目指すとともに、保育の質に注目し

て事例研究に取り組んだ。

実践研に所属する保育者は、そのほとんどが15年以上の実践者である。知識と技術においてはベテランの域であり、情熱と使命感をもつからこそ、たゆまない研修に取り組んでいると自負する。しかし、だからこそ子ども教育の奥深さを知り、瞬間の判断を求められる保育の営みを議論のテーブルに載せ、自分の保育を振り返る必要性がある。実践研はこのような思いをもった保育者の集まりである。時に悩み、同じ思いをぶつ

1 大和郡山市立郡山南幼稚園 (Yamatokoriyama municipal Koriyama-minami Kindergarten)

2 大和郡山市立平和幼稚園 (Yamatokoriyama municipal Heiwa Kindergarten)

3 大和郡山市立矢田幼稚園 (Yamatokoriyama municipal Yata Kindergarten)

4・5 大和郡山市立片桐西幼稚園 (Yamatokoriyama municipal Katagiri-nisi Kindergarten)

けあうことで、「保育は面白い」と再確認して、子どもとともにある保育者としての自分を見つめてきた。その中の2つの事例研究から研究のテーマに迫った。なお、2.「保育者の心の"揺れ"と子ども理解の関係」は藤村が担当し、3.「保育におけるセレンディピティ」は石原が担当する。

2. 保育者の心の"揺れ"と子ども理解との関係

－事例1－

本事例は、ひとつのエピソードを数ヶ月ごとに想起し、4度にわたって振り返りを行っている。

5歳児の担任となった藤村は、4月の子どもの言動に少なからず戸惑った。「遊んでいい?」「今から何するの?」と担任の働きかけや指示を待つ子どもたちの姿に、5歳児として主体的に行動し、生きる力の基礎を培わねばならないと焦りさえ感じた。そのような中で7月の事例が論議された。

2-1 エピソード【カブトムシとの遊び】 5歳児7月 幼児名は仮名

<背景>

保育者の理解がないと不安げで自分から動き出せないような子どもたちが多い。さらに、子ども同士の固定的な力関係が見え隠れしていて、お互いを縛っているような硬い雰囲気がある。その関係性の中で、気になったのが、ショウとサトシである。二人は興味の方向が似ており、共に行動することが多い。どちらかといえばサトシがショウに追随している。言葉が巧みなサトシと体も大きく力任せに行動するショウがいると大概のことが二人のペースで進んでしまう。そんな6月の始め、ユウヤら数名の幼児がふと昇降口近くの廊下に置かれた衣装ケースに目を止め、昨年、たくさんのカブトムシの幼虫を地域の人にいただいたことを思い出した。そこで、カブトムシに興味をもった子どもたちに自分から動きだしてほしいと願い、クラスで飼育することを提案し、数匹ずつ幼虫を観察ケースに移し、クラスで飼育することにした。

<エピソード>

クラスで飼育してきたカブトムシの幼虫が、羽化したことにユウヤが気付きマサトと一緒に観察ケースを覗き込んでいた。まだ、羽根は白っぽい。すぐにでも遊びたくて、カブトムシに手を伸ばしたユウヤに羽根が茶色になるまで待つように声をかけた。ユウヤは、翌日登園してくるなりカブトムシの観察ケースを覗き込み「ほんまのカブトムシになった」と歓声をあげ、「カブトムシの相撲するところろう」とマサトを誘い早速、遊び始めた。「でも逃げたらいややなあ(何かないかな?)」と辺りを見渡すユウヤ。日頃、自分から「～しよう」と声を上げることは滅多にない二人を見て、今日はチャンスだ、積極的に後押ししよう。そして、自分で見つけた遊びの楽しさを一度でも味わってほしいと思った。そこで、「材料室に、ちょうどいいのがあるかもしれないよ」と誘い掛け、一緒に材料選びをした。マサトが「わぁ、これ最高や」縁のある平らで大きな段ボール箱を見つけ、早速、2人で遊び場作りを始めた。今見付けた箱を相撲場所に見立て、そこに細く切った段ボール片を並べて「相撲場に行く道にしよう」と嬉しそうにつなげていった。

そこへ、ショウが「入れて」とやってきて、あっという間に段ボール箱の縁の3、4か所を段ボールカッターで切ってしまった。ユウヤが「あーそこは切ったらあかん」と思わず声を発した。するとショウが「だって、マー君が『いい』って言ってんで」と慌てたように答えた。名前を出されたマサトは困った顔をしている。

ユウヤが「ここ(倒れたら)逃げるやん、相撲するところやねん」とひるまず言い返したことには驚いた。すかさず、ショウが「だったら、こうしたら?」と切ってしまったところに積み木を置いたが、ユウヤとマサトは納得していない表情であった。この表情の中にある思いをショウにも分かってほしいと思い「ショウ君、あの箱マサト君とユウヤ君が相撲の場所にしてるの知ってた」と言葉をはさんだ。一瞬、間があり、ショウが「えっ?だって、マー君が…『(仲間に)入っていい』って言ったんやで」

と戸惑うように答えた。そこに、サトシが「どうしたん。」とやってきた。状況をつかむと「テープでとめたらわ？」ガムテープで修理を始めた。ほっとしたように「それ、いいやん、僕はったるわ」と修理を始めるショウ。マサト・ユウヤはしぶしぶ納得したような様子であったが、切った細長い段ボール片を道にしてつなげたりして、イメージしたものを作っていく。

ショウは先程のような強引さはなく、マサトたちが置いたところをガムテープでとめていく。切ったものをつなげて遊び場が完成する。

ショウが「もういいな。カブトムシ」と遊び場に連れてくると、みんなでカブトムシを這わせたり相撲をさせたりして遊ぶ。



カブトムシの遊びの場が出来上がり遊んでいるところ

<第1次見とり>

この日、ユウヤは初めてショウに「あかん」と言えた。これは意外なことだった。ユウヤにとってそれほど遊びの目的がしっかりとしていたのだろう。そして、ユウヤはマサトと二人、自分たちのペースで遊びたかったのではないのか。そんなところにショウが勝手に入ってきてやりたいようにした。何でも思い通りになると思っているようで困ったなと感じた。それに、やっぱりここでサトシが出てくる。いつもショウのご機嫌を伺っているような態度が目について仕方がない。サトシの自分のしたいことって何だろう。今日、私はそれぞれの子どもたちにどんなふうにかかわればよかったのだろう。勇んでかかわったが途中で援助の方向性を見失った。遊びの終盤は4人が一緒に遊んでいる。マサト・ユウヤがしぶしぶでもショウたちの行為を受け入れたなら、私は見守る方がよいのかな。何とも中途半端なかかわりで終わってしまった。やっぱり今後は、マサトも自分の思いを自分で伝える力をつけてほしいと感じた。

実践研における上記エピソードのカンファレンス（一部抜粋） 斜字は私の思い

※昨年度の担任からは、行儀はいいがやや委縮しているような子どもたちの姿が見られたが、少しずつ気持ちをはぐし、穏やかで優しい子どもたちに育ったと報告を受けていた。

I 「担任が替わっただけで、クラスのメンバーは同じなのにどうして」と言う思いは私も抱くことがあるが、担任が替わるということは子どもたちにとっては相当なことだと思う」

K 「子どももこの先生とどうやって付き合ったらいいのかと揺れているのではないか」

なるほど、子ども側の戸惑いに添っていなかった。この戸惑いを受け止めないで自分の思いが伝わらないと困惑していたのでは…これでは子どももやりきれない。

W 「去年育てた」と思われた力が、子どもの力になっていない。これはどういうことかと考えると“自分でやるという実感を子どもたち自身がもっていたかどうか”に至るのではないか」

M 「5歳児としてふさわしいことと、個々に応じるということと同時にしないといけないうと焦りを感じるのは分かる。新学期はこの思いを抱く保育者は多いのではないか。今は、個と個を丁寧に見ていくことで、関係性を築いていかないといとバラバラになると思う」

K 「いい育ちをしてほしい」と願いをもってかかわっているが、今の子どもの実態と保育者の思いがずれていることがあるのかもしれない」

W 「事実として昨年のごことは把握しておかなくてはいけないが、その事実に基づいてどういう保育がふさわしいのか考えることが必要だと思う」

エピソードを見直すことを通して、自分自身の心の底にある不安感や焦りという"揺れ"が子どもの姿を捉えにくくしていることに気付かされた。一方で、仲間の共感を得たことで漠然とした不安感から、"今すべきことはまず、子どもの姿を見つめ直すことだ"ということのを再認識した。

2-2 エピソード【決めたシュート】 5歳児10月 幼児名は仮名

—自分の保育への向かい方を考えることによって、子どもの姿が見えてきた—

<エピソード>

サッカーが大好きなショウやサトシら4人が「シュートしよう」と遊びだす。そこに、ユウヤが加わるが、2, 3回ボールを蹴って、蹴り損ねてこけると「もういやや」と出ていく。その姿に、ショウが「いつもユウヤは、すぐ抜けて、また、ちょっとしたらずぐに帰ってくるねんで」サトシが「いっつもこうや」と不満気に呟く。

この言葉が私の心にひっかかった。このメンバーは以前からいざこざが絶えない。ショウ・サトシが自分たちの都合のいいように進めることが多いからかと思っていたが、そうではないのかもしれない。今までショウたちもユウヤの行為に苛立ちを抑えたり、我慢したりしていることがあったのではと考えた。ユウヤの動きが気になり、肩を落とし、その場から離れたユウヤに「あれ、ユウヤ君、サッカーやめちゃったの」と尋ねた。目には涙をためている。「シュートがんばってたね、でもうまくいかないのね」と気持ちを汲んで声をかけると、頷く。保育者とユウヤの様子が気になったようで、ナナコが「どうしたん」とやってくる。ナナコは昨日何度もゴールに向かってシュートをしていた。「ユウヤ君シュートうまくいかへんで嫌になったみたい。ナナコちゃんも昨日ずっとシュートがんばってたね、キックのパワーが強くなってびっくりしたわ」と言うとなナコが「うん、おもしろかった。今日もするねん」と駆けていった。その姿に、「僕も行ってくるわ」とユウヤがナナコの後を駆けだした。その後ろ姿に「勝手に抜けたことは『ごめん』って言わんとね」と伝えると、振り返って保育者の顔を見ると、ニッと笑って駆けていった。ショウの「ほらな。また、すぐ帰ってきた」という声にユウヤが「うん、ごめん」と答えた。予想外の言葉にショウは、ちょっとびっくりした顔をしている。サトシ「…いいで、もう試合するで」と声をかけた。この姿は意外であった。ユウヤが自分自身を奮い立たせて再び遊びに戻ったこと、そんなユウヤを受け入れられたショウ、サトシの姿にそれぞれの幼児の内面の育ちが見て取れて嬉しいと感じた。

<第2次見とり>

子どもたちの気付きを引き出し、互いの思いをつなげる援助を心掛けてきたことで、少しずつではあるが子どもの姿に変化が見られるようになった。友達や言葉に関心を持ち、目を向けたり、聞こうとしたりするようになってきた。

以前の「カブトムシとの遊び」では、力関係の中で自分の思いを出せなかったり、強引に自分の思いをぶつけたりしたような困った出来事だと否定的にしか見られなかったが、本当にそうだったのだろうか。

今まで大概のことを自分ペースで進めてきたショウに対しユウヤが「あかん」と言ったことは、ショウにとっても意外だったと思われる。とっさに「マサトが『いい』と言ったから」と答えている姿にはショウの動揺を感じる。そこに私が「ショウ君、あの箱マサト君とユウヤ君が相撲の場所にしてるの知ってた」と声をかけた。この言葉がけは思いをつなぐというよりは、ショウにとっては責められたような印象をもったの

ではないか。この言葉を捉えても私の中に、ショウを受け入れられていない自分がいることに気付く。

保育者がかかわったことで様子を見に来たサトシが新しい方法を示した。"ここでも、また、サトシはショウの肩をもつ"と言うような思いがよぎった。果たしてそうだったのだろうか、機転の利くサトシは友達が困っている雰囲気を感じて、自分なりに解決できる方法を純粹に考えたのではないか。そう考えると、トラブルの過程があったことで、一緒に遊んでいるメンバー同士が何をイメージして作っているのか、遊びの目的が共通になり、最終的にはカブトムシと遊ぶ楽しさを味わえた。保育者は少々腑に落ちないことがあっても、子ども同士が選んだ解決策であればできる限り見守っていてよかったのではないかと思う。

12月入り、園内研究会が行われた際、保育カンファレンスを行った。エピソード記録の中にあった「カブトムシの遊び」の中で、「ショウは友達が何をやっているか、様子を見て進める経験が少ないのではないか。今まで好きなように進められていたということは、クラスの中に受け入れ側の子が多かったからではないか？ そんなショウにとっては"困り"が大切である。今回は仲間のサトシの提案で助けられたことは、大事な経験となったのではないか。」という意見があった。

私は、このようにショウを見とったことがあっただろうか。この言葉をきっかけに子どもの行動の中にある意味を考えようとしなかった自分を意識した。エピソードを振り返ったことで、子どもたちのそれぞれの姿や関係が違って見えてきた。

<第3次見とり>

エピソードの中のショウの行為は自分本位なものだったのだろうか。「僕もダンボール切りたい。手伝ったるわ」「僕やったら、うまいことできるで…」そんな素直な気持ちでかかわってきたのではないか。そして、ユウヤの「あかん」の言葉にユウヤやマサトの気持ちに触れ、自分なりに、何とか修理しようと考え積み木をもってきたのではないか。さらに、互いの言い分はあるが折り合いをつけて遊びさせたことに一方的な関係ではなく、一緒に遊んだことを楽しんでいたのではないかと感じた。

<第4次見とり>

翌年も年長児を担当することになった私は、学期末に、自分の持ち味を生かしながら、思い思いの遊びを繰り広げている子どもたちを目の前にして、昨年の子どもの姿を思い起こしてみた。

昨年度の「カブトムシとの遊び」のエピソードを今から振り返ると仲間の中でそれぞれが色々な心の動きを見せ、考え合っていることが読み取れる。「じゃあ積み木で困ったらわ？」というショウの発想も、「ショウらしいな。うまく考えたね」と今は肯定的に受け止められる。また、子ども同士の思いをよりつなげたいのであれば、いざこざの仲裁に保育者が言葉をかけるというより、子どもの遊びの中や会話にさりげなく入り、子どもと対等な仲間として一緒にカブトムシの相撲に歓声を挙げて楽しむことで遊びの楽しさを意識づけ、子ども同士の思いをよりつなげたのではないかと思う。

なぜ、あの頃はそう思えなかったのだろうか。私の見方が「ショウはこういう子」「ユウヤは」「マサトは」「サトシは」というように個々の幼児に対し、固定化した印象が強く、理解の偏りがあったために、行為そのものが否定的にしかとらえられなかったのではないだろうかと思いついた。

[エピソードを振り返ることから]

今回のカプトムシの事例は同じ場面でありながら、第1次見とり～第4次見とりというように、見とりが変わっていった。

実践研で、エピソードを通してカンファレンスを行った中で、私自身の不安定さからくる"揺れ"が私の保育に大きく作用していることや気持ちのもち方で子どもの受け止めが変わることに気付かされた。当初「自分で考え、自分で楽しみをみつけてほしい。自分の思いをもっと出してほしい。」と動き出さない子どもたちに焦りを感じていた。また、そのことを保護者にも分かかってほしいと、一方的に伝えたことで、保護者の不信感をあおり、信頼関係を築くことができなかった。これらが重なって、また新たな焦りとなり、子どもを否定的にしか捉えられない自分自身に苛立ち、悩みとなり、子どもや保護者との関係に悪影響をもたらしていることが分かった。

時間が経つにつれ、幼児の捉え方に気持ちが向かい、あの時の見とりはあれでよかったのか、こんな風に考えられるのではないかと、もう一度エピソードを振り返ろうとした。きっかけとなったのは、つながりが見えてきた子どもの姿と研修会での学び、信頼のおける保育者からのアドバイスや共感などが考えられる。

自分自身の気付きという点では、昨年度から継続的に観察者として来園しているI氏とのカンファレンスも大きなきっかけとなった。I氏による「1学期は『自分で…』『自分で…』と言う投げかけをよくしていて、先生の願いが強く前に出ているのを感じた。」と言う言葉が私の頑なになっていた気持ちを一変させた。前年度の保育者と子どもが作ってきた生活を受け止められなかったのは私自身であることに気付いた。

この思い起こしの中で、自分自身の中に潜んでいた問題意識が浮き上がり、子どもに対する理解が変わっていった。このことで私自身の気持ちが安定し、保護者に対して自分の思いを伝えるだけでなく、保護者の思いや言葉にもゆとりをもって受け止められるようになった。保育者が子どもの内にある育ちを意識することで、保護者にかける言葉が変わり、関係が少しずつ改善し、クラス全体の雰囲気を変えていった。

上松²⁾は、カンファレンスを通して他の先生方の

多様な目や見方からの考え方を聞くことによって、自分の取った行動の背景に在る私の思いや自分の取った行動がもたらした意味について掘り下げて考えることができたこと述べている。

保育は瞬時の営みである上に、変容し続ける子どもと向き合うことである。保育者自身の固定的な見方は、幼児の育ちを見過ぎしたり、阻んだりすることにもなりかねない。子どもの見方が変わると、関係性の読み取りが変わる。状況そのものが違って見え、課題解決の糸口が見つかることもある。

以上のことから、保育者の資質向上のために、自分の保育を振り返り、子どもの姿を丁寧に見とることの大切さを感じた。保育者の心の"揺れ"は、子どもの育ちを願う保育者の熱い思いがあるからこそ揺れてあり、揺れがあることで、より子ども理解ができていくのではないかと思われる。それは一人の作業ではなく、その振り返りを語り合える仲間がいることが、自分自身を見つめ直すことになり、より深く子どもを理解し、保育者としての資質が高まり、それが保育の質の向上につながっていくと考えた。

3. 保育におけるセレンディピティ ―事例2―

～たまたま(偶然)のできごとを質の高い保育につなげるために～

子どもは、日々の生活の中で小さな変化や出来事に目をとめ、興味・関心をもってかかわろうとする。それが遊びを生み出す原動力ともなる。しかし、時に保育者は子どものその興味・関心(心もち)に気づかないことがある。だからこそ、子どもが気付く。小さな変化や出来事にともにかかわることが、子どもとともにいる保育者の大きな役割であり、ひいては保育者の資質につながる。倉橋³⁾は「育ての心」で子どもの心もちは、かすかにして短き心もちを見落とさない人だけが、子どもと俱にいる人である、と述べている。次の事例は、3日ぶりに登園した子どもたちが園庭の隅で見つけたキノコから始まった事例である。

3-1 エピソード【きのご発見】 5歳児6月 幼児名は仮名

6月21日(火)。昨日は、土曜参観の代休だったため、2日休んでの登園。子どもたちと挨拶を交わした後、野菜や花への水やりを忘れないように促す

すると「先生！大変！毒キノコが！毒キノコが！」と、保育室に駆け込んでくるソウスケ「えっ！毒キノコ？どこに？」と、私が驚いて聞くと「こっち、こっち！」と、走って行く。私も急いでソウスケの後ろを追う。そこには、真っ白な大きなキノコがあちこちから生えている。「わぁーすごい！」と、私が歓声を上げると「おナスに水やりしようとした時に、僕が見つけたん！」と得意げなソウスケ。

いつの間にか、そのキノコを取り囲んでいる何人ものほし組の子どもたち。「去年も、ここに同じような毒キノコが生えたなあ」「去年のほし組さんが見付けて、教えてくれたな」「ここに看板立ててあったで、「きけん どんくキノコ」って」「他の組にも知らせとかんとあかんな」「でも、去年のとはちよつと形が違うで。」等等、口々に話す子どもたち。「ほんと、去年のとは少し形が違うみたい…」と私も興味深くのぞき込む。

ふと、顔を上げると嬉しそうに私の顔を見る子どもたち。その目は、なんだかいたずらっぽく私に訴えかけてくる。「触ってみたいの？」と聞くと、「ウン！」と嬉しそうに答える子どもたち。「でもほんとに毒キノコだったらダメだし…」と私がニヤツとして呟くと、子どもたちもニヤツと笑う。

そこで、子どもたちに「どうしても触りたい？」と聞くと、「ウン！」と先ほどより大きな声で答える

そこで、私は急いで使い捨てのビニール手袋を取りに戻り、子どもたちに、「これを使ってなら、大丈夫だと思うけど…」と、言って一人ずつに渡す。「大丈夫や。これやったら毒、つかへんもん！」と、みんなで確認し合う子どもたち

「わぁ！なんか柔らかい！」「ふにゅってした感じ！」などと、それぞれにその感触を味わっている。「先生も触ってみたい…」と呟く私に「はい」と手袋を渡してくれるリョウジ。

その感触を味わっている私を子どもたちは興味深そうに見つめている。「たしか、お部屋の裏にもキノコがいっぱい生えてるよなあ」と、タイキ。「あったあった！」と、もう子どもたちは走り出している。そこには、また、違う種類のキノコが乱立している。

子どもたちは、すかさずビニール手袋をはめ触っている。「これは、なんかヌルツとしてるなあ。」と、先ほどのキノコとの感触の違いを感じているようだ。「他にもあるかもしれないから、ちよつと探検してくる！」と言うソウスケと一緒に、シウヤやリク、タツヤなどいつものあまり一緒に遊ばない子どもたちも一緒だ。

探検も一段落すると、今度はキノコの名前調べが始まった。可能な限りの図鑑を持ってきて比べようとする。「これかな？どうかな？」と見付けてきたキノコと見比べる子どもたち。でも、よく分からないともう一度キノコが生えているところに飛んでいく。

その中でリクは、図鑑を横に置いて、書いてあるキノコの名前をひたすら紙に書き写している。そんな様子のリクを今まで見たことがなかった私は、感動すら覚え声を掛けるのも失礼に思った。

次の日。書店で見つけたキノコの図鑑を子どもたちの見えるところに置いておくと、早速、子どもたちは見つけそれを持って「探検に行ってきたーす！」と、園庭に飛び出して行った。

戻ってきた子どもたちに「見つかった？」と、聞くと「いろんなキノコが、あったで」「シャッキリダケもあった」「毒キノコもあった」と言う。「どこにあったの？」と聞くと「ブランコの後ろとか、森のこととか…」と言うので、「みんなにも分かるようにできるといいのにね」と私が言うと、「そしたら、みんなでキノコの地図を作ろう！」と、地図作りが始まる。

保育者の思い

2日間の間に野菜がどれだけ成長しているかを自分で確かめたかったことと、休み明けは保育室での指示が必要な子どもも多いので、あえて私は一緒に行かず声がけをするだけにとどめた。

とにかく急いで行ったのは、ソウスケの声や様子に本当にびっくりしたからだ。白くて大きなキノコを見たときは、心の底から「すごい！」と思った。

のぞき込んで、私はキノコに触ってみたい衝動にかられた。そんな私の思いを、子どもたちに見透かされたのだろうか？

大義名分を得た私は、嬉しくて足がおのずと速くなる。「ビニール手袋」とは、我ながらよく考えたものだ。

私は、リョウジに子どものように思われたのか！

いつも泣いているリク。一人していると不安になるリク。そのリクが、一人で黙々と取り組む姿を邪魔してはいけないと思い、一段落したころに声をかけた。

私の慌てよう、驚きようを見て、「いったい何があったんだ？」と、子どもたちは思ったのだろう。

去年のこと、よく覚えているな。これを生かせるといいが…

実は、この場所は、リンにとっては行ってはいけない場所になっていた。リンが一人で裏に行ってしまうと見えなくなるので、私と特配教員とリンの3人で「毒キノコがあつて、危ないから、いかない場所」としていただ。リンは、「毒キノコやで。さわったらあかんで。あぶないで。」と言いつつもその輪の中にいる。そんなリンの姿を見て、私は友達からいろんな刺激を受けて、この場所がリンにとってどういう場所になっていくのだろうと思う。

<考察>

この日は、保育者が信頼を寄せているW氏が来園されることになっており、朝から普段より気分の高揚があった。そのことが、子どもたちがキノコを発見したことに対し、いつにも増してワクワク・ドキドキしながら対応することにつながったように思われた。この保育者のワクワク感・ドキドキ感と、子どものワクワ

ク感・ドキドキ感が相乗効果をもたらし、“偶然”に“たまたま”見つけたキノコが“必然”として、特別なキノコとなった。そのキノコを前にして、保育者と子どもが対等な立場で共に考え、そして、その中で保育者がアイデアを出したことが、子どもたちに対するほどよい刺激(援助)となり、子どもの主体的な姿として表れたように思われた。

3-2 エピソード【先生、新聞の切り抜き持ってきたよ】 5歳児5月 幼児名は仮名

子どもたちの間で、お天気のことが話題になる日々が続いたある日「今日は、晴れてニュースで言ってきたよ」と、ココナが言う。「明日は、どうなんやろ」と、言うので「新聞には、1週間分のお天気が載ってるよ。お家に帰ったら、見てごらん」と、新聞にも興味をもてればいいなという思いも含めて声を掛けた。

次の日「先生、持ってきた！」と、新聞の切り抜きを差し出すユイ。「新聞でお天気を調べてきたのね！」と私が言うと、嬉しそうに「うん！」と頷く。そこで、持ってきてくれた切り抜きをボードに貼ると、他の子どもたちも集まってきて、興味深く見ていた。

その次の日から、何人も天気予報の切り抜きを持って来るようになった。そして、天気予報だけではなく、気になった記事を切り抜いて持って来る子どもも現れた。子どもたちにとって、新聞は意外に身近なんだと、驚く私。子どもたちが持ってくる新聞記事を紹介する“ニュースの時間”を設けた。記事を持ってきた子どもが、アナウンサーになって、ニュースの紹介をするのであるが、友達に興味をもって聞いてくれている事を感じとても嬉しそうな子どもたち。聞いている子どもたちも、「僕もそのこと知ってる！」「私も、見た！」「へー、そんなことがあるんや」などと興味津々。子どもたちの知的好奇心をくすぐるようだ。子どもたちは、マイクやテレビも作って本当のニュースの時間みたいにしようと、遊び始めた。しかし、子どもたちの視点は、とても面白い。(おそらく大人だったら、あまり切り抜こうとはしないだろうなという記事も多い)記事の写真から切り取ってくるようだが、自分が見つけた！という何とも言えない自信が見えて何だかほほえましい。

自分で新聞の記事を読めない子どもたちが、喜んで園に持ってくるのは、きっと保護者の方々がいろいろな記事をわかりやすく説明してくださっているのだと思う。



ニュースを聞いて質問をする子どもたち



“ニュースの時間”で新聞の切り抜きを持ってきた子が読む

<考察>

新聞の切り抜きを持ってくる遊びが広がった背景には、たまたま子どもがつぶやいた言葉を保育者が興味を持って受け止め、さらに子どもたちに投げかけた言葉がきっかけとなった。また、保育者の言葉を受けて子どもが持ってきた新聞の切り抜きを掲示したり、切り抜いた新聞を紹介する“ニュースの時間”を保育者が

意図して設けたりしたことで、子どもたちの興味が天気から社会情勢など、様々なものへと広がり、“たまたま”生まれた遊びが、子どもたちの視野を広げたものと思われる。

3-3 エピソード【遠足は、バンビに会いに行こう！】 5歳児 5月 幼児名は仮名

新聞のニュースごっこで「奈良公園でシカの赤ちゃんが生まれました！」というニュースを聞いてから、子どもたちはシカの赤ちゃんのバンビに会いたいと思っている。

そんな時たまたま「北海道でシカが増えすぎて困っている」という新聞のニュースを持ってきた子どもがいた。すると、「奈良公園のシカは、大丈夫なんかな」「奈良公園のシカはかわいいで」「シカ煎餅あげたら、こんにちはって首を振るねんで」「ほんで、横断歩道も渡るねんで」と子どもたち。そして「わあー、シカに会いたくなっちゃった」「みんなで行こうよ！」「先生も会いたいやろ？」と、口々に言う。

この子どもたちの気持ちをうまく生かせないかなと思ひながら、「そら、先生も会いたいけど…どうやって行くの？」と、聞くと「歩いて行こうや！」「奈良公園は、遠いで」「ほんなら、先生の車で行ったらわ？」「でも、先生の車は、4人しか乗れないよ」「いいこと考えた！こないだ遠足で大型バスに乗って行ったやんかぁ。また、大型バスに乗って行ったらいいねん！」「それ、いい考えやな！」と、子どもたち。「でも、みんなだけでは決められないな」と言う。「そうや、園長先生に聞いてみよう！」「いつ空いてるか、聞いてくるわ」と数人の子どもたちが園長先生の所に聞きに行くことに。今までも、クラスの中で解決できないと園長先生に助けを求めていた子どもたち。きっと園長先生はうまく答えてくれるだろうと期待する私。「どうして、奈良公園に行きたいの？」と尋ねる園長先生に「バンビに会いたいし、こんにちはってするシカも見たいし、横断歩道を渡るシカも見たいから」と子どもたちは矢継ぎ早に言う。

園長先生は、手帳を取り出した。子どもたちの目は、その手帳に注がれる。「そうね、6月は予定が一杯だし、7月も予定が一杯だわ。8月は何もないからどうですか？」と、子どもたちに尋ねられる。すると、子どもたちは「えー、8月は夏休みやし、暑いからなあ…。他には無いですか？」と、聞き返す。「そしたら、9月は敬老会があるし、10月は運動会があるし…。でも運動会が終わったら、今のところ何もないから、10月の終わりくらいはどうですか？」と言われると「それでいいです！」と大喜びの子どもたち。秋の遠足は奈良公園に決定！と、自分たちで決めた満足感でいっぱいの子もたちだった。保育室に戻ってきてその結果を心配そうに待っていた子どもたちに「10月の終わりだったら、行けるって園長先生が言ってくれたけど、それでいい？いいと思う人は手を挙げてくださーい！」と言うと、みんな「さんせーい！」と手を挙げる。そんな子どもたちの姿をニヤニヤしながら見守った。



子どもたちが持ってきた切り抜きを掲示した。

<考察>

「バンビ誕生」の新聞のニュースから"シカ"を知り、興味をもっていた子どもたちが、たまたまよく似た時期に北海道のシカのニュースを知り、"シカ"についての興味がさらに大きくなった。シカは子どもたちにとっては身近であり、会いに行こうと思えば会いに行けることを知っている。そこで、少し前に行った春の遠足での経験を結びつけ、みんなでもう一度遠足に行こう

と考えたようだ。たまたま、秋の遠足は奈良公園に行くことに決まっていたこともあり、子どもたちの思いをうまくつなげることができた。

3-4 エピソード【"たいのたい"っておもしろいな】 5歳児7月 幼児名は仮名

家から、不思議な形をした魚の骨と、その骨のことを書いた記事を持ってきたトモキ。子どもたちも集まり、「何?」「何かの形に見えるんだけど…」と不思議そうに見ている。子どもたちの興味津々な姿を見て、何故かワクワクしてくる私。そこで、その不思議なものの説明を記事と共に説明をする。それは鯛の骨で"たいのたい"ということ。「へー、そんなん知らなかった」「見たこと無いわ」「"たいのたい"って面白いな」と子どもたち。そこで「今度、お魚食べたときに見つけてごらん」と声を掛けておく。



「たいのたい」の切り抜き

数日経って「先生、"たいのたい"!」と『マダイ』と『カンパチ』の"たいのたい"を持ってきたナナコ。(話を聞くと、買い物に行くたびに魚のコーナーに行き、自分で魚を選ぼうとするらしい)それぞれ、微妙に形が違って不思議だ。それから、次々と『サバ』『イサキ』『メバル』『サンマ』の"たいのたい"がいろいろな子どもたちから届く。私も、"たいのたい"は知っていたが、他の魚にもあることにびっくり。子どもたちの興味が、日常の生活に広がっていくことがおもしろい。保育室は"たいのたい"のコレクションでいっぱいになる。

でも、何より嬉しいなと思ったことは、子どもたちが幼稚園での出来事を家庭でも話をし、それをお母さんが受け止め、また、子どもたちに返してくれていることだ。きっと、夕飯の時間は、楽しい時間だったのだろうと想像できる。保護者に感謝だ。

ナナコの母親が、"たいのたい"で一番おもしろい形をしているのは『ガシラ』(カサゴ)だということを教えてくれるが、私も見たことが無く、誰か持ってきてくれないかと楽しみにしておこう!

<考察>

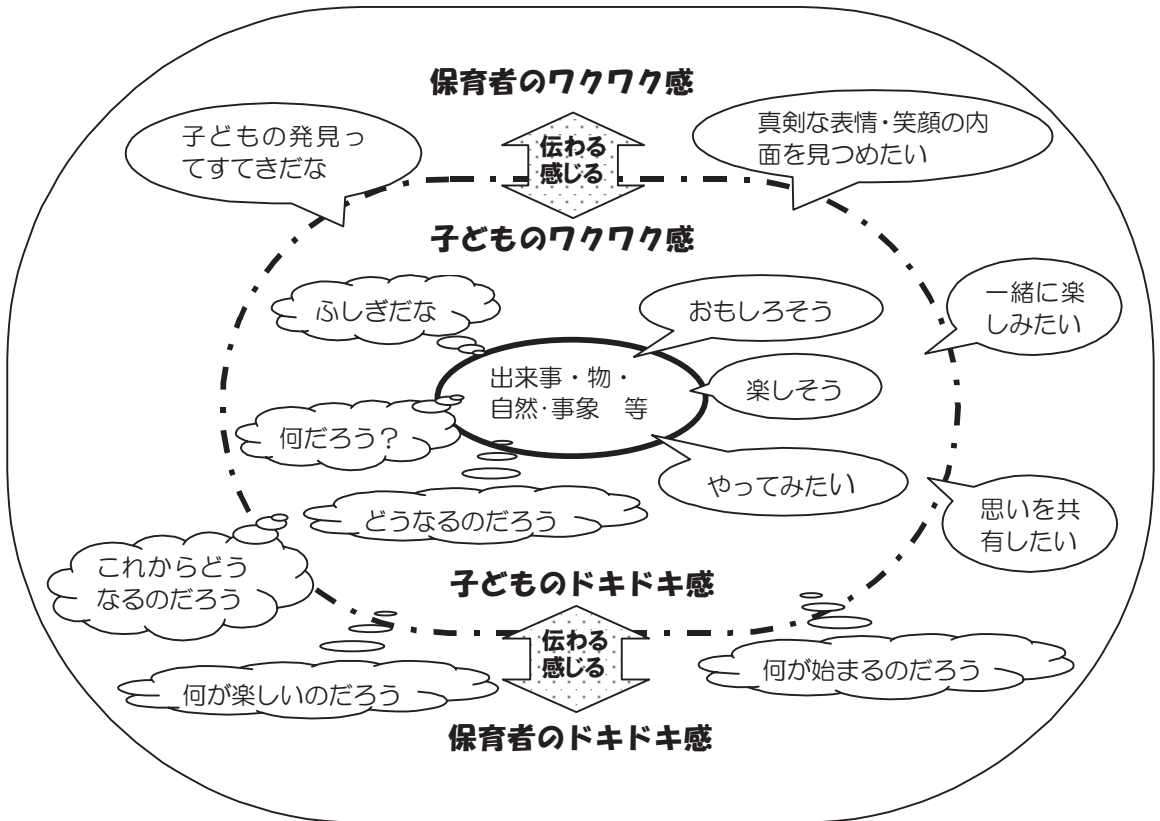
たまたま子ども向け新聞に載っていた"たいのたい"の記事に興味をもった子どもが本物の"たいのたい"を食事のときに見つけ新聞と共に持ってきた。ほかの子どもたちも興味を持ったようなので、『食事の時にひとつの話題となれば…』と思い、たまたま投げかけた言葉が子どもたちの知的好奇心をくすぐり、いろいろな魚の"たいのたい"のコレクションごっこに発展したと思われる。

ワクワク感やドキドキ感は、次にどうなるかわからないという思いや、自分が予想しないことが繰り返し起こるかもしれないという思いなど、次に起こることを前向きに期待しながら待っている気持ちのようなものと思われる。

3-5 保育者のドキドキ感・ワクワク感を見つめて

子どもは、様々な出来事や事象等に会った時、「何だろう?」「楽しそう」等、心を揺り動かし、そのものに集中して真剣に向かう姿がある。その時の心の

動きがワクワク感やドキドキ感ではないだろうか。保育者のワクワク感やドキドキ感は、そんな子どもたちの姿を見た時、「これから、どんなことをするのだろうか」と様々な出来事や事象に対しての保育者の思いや願いも含めての期待感ではないだろうか。そのような思いを共有するために、保育者と子どもが『一生活者』として、共に生活する中で互いを"主体者"として、尊重し認め合う営みをつくっていくことが大切である。しかし、保育者は主体者同士という関係だけでなく、援助者という役目も担っていることを忘れてはならない。保育者がその場の状況や子どものワクワク感やドキドキ感を瞬時にとらえ、さりげない援助やほどよい援助をすることで、子どものワクワク感やドキドキ感、そして主体としての意識や喜びが高まり、更なる活動へとつながっていくと考えられる。保育者自身が常に様々な出来事や子どもの姿に気持ちを揺り動かしていくことが、子どもの発見や驚きにつながっていくのではないと思われる。



子どもと保育者の気持ちの動き

3-6 "偶然"や"たまたま" (セレンディピティ)と保育の質について

上記の4つのエピソードの中で"たまたま"ということが記されているが、この"たまたま"つまり、セレンディピティであると捉えた。

茂木⁴⁾によると、"セレンディピティとは、偶然の幸運に出会う能力である。"と述べている。偶然の出会いには誰にでもあるが、その時にその出会いに「気付いて」、いろいろ考え、吸収して自分のものにすることができるか、つまりは「偶然」を「必然」にすることができるかが、セレンディピティであると捉えた。思いもかけぬ出会いをきちんと自分のものにできることや、そのような柔軟な瞬発力がセレンディピティのために必要であると考えた。

以上のことから考えると、保育の営みはいかにセレンディピティで成り立っているのかということである。

しかしながら、素朴な日常の小さな出来事の中にどれだけの意味を発見し、それを子どもたちとおもしろがり、共有していけるかは、保育者の感性や度量、努力や力量と大きくかかわっている。このような保育者の資質が保育の質であると捉えるならば、セレンディピティを意識し、自覚しながら、保育を構築していくことが大切であると思われる。

<指導計画と"たまたま">

私達保育者は、子どもの発達に即して作成した指導計画をもとに、保育をしている。長期的な見通しをもった計画から短期的な計画など、子どもの発達を促す指導計画を大切にしているはずである。

しかし、日々の生活の中で、"たまたま"や"偶然"が起きる。保育者の意図と子どもの興味を組み込んだ環境の構成の中で、たまたま起きた出来事や偶然子ども

保育者自身の心もちが大きく作用し、さまざまな心身の揺れによって保育の質にかかわることさえある。しかし、第2の刺激的、挑戦的環境の提供は、事例2によっても明らかのように"たまたま"の出来事や発見を環境として取り入れていくことで新たな遊びや仲間関係が生まれる。さらに、そこに選択や思考判断の余地が子どもに与えられることにより保護者や家庭、地域を巻き込んだ遊びが深まり、保育の質が高まると考えた。

保育を振り返ることの厳しさに向き合い、"たまたま"の出来事の遭遇を保育の質の向上に変えていくことのできる保育者であり続けるために、今後も事例研修を重ねることを改めて確信し合った取り組みであった。

引用文献

- 1) 文部科学省：「幼稚園教員の資質向上について：自ら学ぶ幼稚園教員のために」、『幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書』（2002）
- 2) 岡花祈一郎，杉村伸一郎，財満由美子，松本信吾，林よし恵，上松由美子，落合さゆり，山元隆春：「「エピソード記述」による保育実践の省察：保育の質を高めるための実践記録と保育カンファレンス」、『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』37，p.233（2009）
- 3) 倉橋惣三：『育ての心（上）』，フレーベル館，p.30（1976）
- 4) 茂木健一郎：『セレンディピティの時代：偶然の幸運に会う方法』，講談社，p.20（2009）
- 5) 秋田喜代美：『保育の心もち』，ひかりのくに，pp.76-77（2009）